

希望 —目に見えないもの—

新 茂 之

奨励者紹介〔あたらし・しげゆき〕
同志社大学副学長
同志社大学国際連携推進機構長
同志社大学文学部教授
〔研究テーマ〕経験論的哲学の諸相

わたしたちは、このような希望によって救われているのです。見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお望むでしょうか。わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。

（ローマの信徒への手紙 8章 24—25 節）

はじめに

本日のチャペル・アワーは、アドベント礼拝となっております。ご承知のように、アドベントは、キリスト・イエスのご降誕を待ち望む期間を意味しています。日本語ではアドベントを待降節と呼ぶ場合もあります。キリスト者にとって、キリスト・イエスは、救いの希望であります。とはいえ、この礼拝堂でこのようにみなさんとお会いしているような形では、キリスト・イエスを見たという経験は、残念ながら、わたくしにはありません。確かに、信仰的には、キリスト・イエスとの霊的な出会いは、わたくしの中にありはします。そうでありはするものの、それでも、やはり、キリスト・イエスは、少なくともわたくしにとっては、文字通りに、目に見えないものに位置しています。しかしながら、パウロは、目に見えないものに希望を見出しています。なぜ、そのように言えるのでしょうか。ほんとうに、目に見えないものは、希望になるのでしょうか。みなさんは、どのように感じられるでしょうか。本日のチャペル・アワーでは、みなさんの貴重なお時間をお借りして、目に見えるものに軸足を置いているわたくしたちのあり方を振り返りながら、目に見えないものがわたくしたちの生活にどのように働いているのか、目に見えないものの意義をみなさんといっしょに考えてみたいと思います。

まず、目に見えることがわたくしたちにとってどれほど大切であるのか、その重要性を、現代の社会的情勢も踏まえながら、確認します。次に、目に見えることの力強さに留意しながらも、わたくしたちの生活がけって目に見えるものだけで成り立っていないという点を示します。現在のわたくしたちは、どこに向かって生きているのでしょうか。過去でしょうか。それとも、未来でしょうか。将来は、わたくしたちのところにはまだ来ていないにもかかわらず、わたくしたちは、将来に向かって生きようとしています。将来は、目には見えないものであるにもかかわらず、わたくしたちを一定の方向に導きます。このような見方に基づいて明らかにしたいのは、こうであります。すなわち、目に見えるものだけを頼りにしているように思える科学的探究ですら、目に見えないものが肝要な働きを担っている、と。それは、科学的探究の中では仮説として

現れています。仮説は、将来と同じ役割を科学的探究の中で演じています。こうした見地に立って、わたくしたちが真に望んでいるのが目に見えないものであるというパウロの考え方に迫りたいと思います。

1 目に見えること

パウロは、たとえば、ローマの信徒への手紙の中で、目に見えるものに対する希望が希望ではないとはっきりと述べています（ローマの信徒への手紙8章 24 節）。キリスト教的信仰の核心は、見たことも触れたことも聞いたこともない神を信じるところにあります。そのような神への信仰がキリスト者を支えていますので、キリスト者の希望は、目に見えないものに接続しています。だから、パウロの主張は、キリスト教的には当然の考え方を示しています。しかも、キリスト教的信仰の中核に位置しているのは、死者の復活であります。というのも、わたくしたちのあらゆる罪を背負って十字架に上げられたキリスト・イエスは、処刑された後、三日後に蘇られ、天に昇られたからであります。キリスト教の中では、わたくしたちの魂の救いは、神がわたくしたちの罪をことごとく赦すという形で現れ、それは、死者となられたキリスト・イエスの復活によって成就しています。そうであるので、パウロは、こう断言します。「キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です」（コリントの信徒への手紙一 15 章 14 節）。キリスト・イエスの復活があるからこそ、キリスト者の信仰があるのであって、それがなければ、キリスト者は、信仰のすべてを喪失してしまうのです。

しかしながら、どうでしょうか。みなさんは、死者の復活を信じられるでしょうか。おそらくは、みなさんからは否定的な答えしか返ってこないと思います。なぜでしょうか。答えは、そう難しくはありません。なぜなら、死者の復活を見たという経験がみなさんにはないからであります。それに加えて、死者がほんとうに復活したというのを聞いたためしもないでしょう。魔術が支配していた昔であれば、人々は、そのような話をまことしやかに語っていたかもしれません。しかしながら、今の世の中では、それは、通用しないでしょう。正直に言えば、そのような体験は、わたくしにもありません。それにもかかわらず、パウロが公言しているように、キリスト・イエスの復活がなければ、キリスト者の信仰は、ないに等しくなってしまう。それゆえ、わたくしは、いつも次のように祈らざるをえません。神よ、主の復活をパウロのように固く信じているのか、という問いに自信をもって「はい」と言える勇気をわたくしに与えてください、と。

このように、この世に生きるわたくしたちは、目に見えることに照準を定めています。目に見えることは、きわめて重要なことがらでもあります。なぜ、わたくしたちは、死者の復活を容易には信じられないのでしょうか。すでに述べたように、その理由は、単純です。わたくしたちにとっては、死者の復活が目に見えるものの範疇にありません。裏返して言えば、目に見えることは、存在の確かな証拠となっています。百聞は一見にしかずということわざがあるように、あることがらについていろいろと聞いたところで、それを一目見れば、それが存在するのをすぐに信じられるようになります。証拠を実際に示すという行為は、ほかの人を説得させるのに効果的な方法であります。科学的な探究は、その点を明白にしています。科学的な探究を支えているのは、実験と観察であります。どのように立派な理論を立てようとも、その正しさを実地に示せなければ、わたくしたちは、空しい考え方としてそのような理論から距離を取らなければならないでしょう。ある物質の存在をどれほど声高に唱えようとも、それを実際に目で確かめられないかぎり、それを容易には認められないはずであります。実験と観察は、いろいろな見方の正しさを明らかにするときになくて

はならない手段であります。

逆に、ある状況がしっかり見えていないのに、それを信用すれば、わたくしたちは、どのような事態に陥るでしょうか。わたくしたちの身の回りでは、さまざまな詐欺が横行しています。電話から聞こえてくる声が

知人の名前を騙^{かた}っているときに、声の主がほんとうに当の知人であるのかどうか、それを見定めなくて、知人が電話を掛けてきていると信じ込めば、わたくしたちは、詐欺に遭いはしないでしょうか。悲しいことですけれども、通信の技術と機器の飛躍的な発展によって、目に見えないことを利用してわたくしたちを騙すという事案がほんとうに多く発生しています。わたくしたちは、インターネットで相手と繋がっていますけれども、相手を実際には知っていません。なるほど、その人から写真を送ってもらえましょう。とはいえ、それが真実をいつも反映しているとはかぎりません。別の人物がその写真に写っているかもしれません。相手は、目に見えないものの部類に入っています。このような時代に生きるわたくしたちにとっては、何も考えずに目に見えないものに期待を寄せてしまうのは、危険であります。

2 目に見えないものとしての将来

このように、わたくしたちは、目に見えることを重視しなければならない社会の中で生きています。だから、わたくしたちの考え方も目に見えることに傾きがちになります。このような語り方をしているからといって、けっして目に見えることを軽視しようとしているわけではありません。目に見えることの大切さは、揺らぎません。それを踏まえた上で、今度は、翻って、みなさんに次のように問い掛けてみたいと思います。わたくしたちは、ほんとうに目に見えるものだけに頼って生きているのでしょうか。わたくしたちは、はたして目に見えないものを避けて通れるでしょうか。みなさんは、こうした質問にどのように応答されるでしょうか。

時系列に沿って言えば、わたくしたちは、過去を生き現在を通して未来に向かっています。未来を将来と呼んでもよいでしょう。将来は、字義通りにまさに来ようとしていますけれども、わたくしたちのところにはまだ来ていません。だから、将来は、未来でもあります。わたくしたちは、まさに将来を見ようとしています。とはいっても、わたくしたちは、まだそれを見ていません。その意味では、未来である将来も将来である未来も目に見えないものに帰属していると言えるでしょう。いま、わたくしたちは、キリスト・イエスのご降誕を待ち望むアドベントの時期を過ごしています。みなさんは、クリスマスをどのように過ごそうか、いろいろ計画を立てているのではないのでしょうか。家族といっしょにしようと考えている人もいるかもしれません。親しい人との食事を思い描いている人もいるでしょう。教会のクリスマス礼拝のことを念頭に置いている人もいるのでしょうか。旅行を検討している人もいるはずで。新型コロナウイルスの感染が拡大していなければ、年末と年始を海外で過ごす人も多かったでしょう。ここで列挙したクリスマスの企画は、クリスマスを迎えていないわたくしたちにとっては、すべてまだ起きていない事象であります。確かに、わたくしたちは、そうした様子を頭の中で想像できはします。しかしながら、それらは、いまだ実現しておらず、空想の域を出ていません。わたくしたちは、それを実際に見ているわけではありません。それゆえ、これから成就しようとしている将来は、目に見えないものになっています。

確かに、将来は、目には見えません。それにもかかわらず、将来が担う役割は、わたくしたちにとって小さくはなく、将来は、わたくしたちがいまを生きる上では欠かせません。クリスマス家族といっしょに過ご

したい人は、家族の予定を聞きながら自分の仕事の段取りをつけるでしょう。親しい人と食事を楽しもうと思案している人は、その人の都合を聞いたり店を予約したりするでしょう。教会のクリスマス礼拝に目を向けている人は、その準備を他の教会員とともに進めていくでしょう。旅行の計画を持っている人は、それを実行するためにいろいろと用意しなければならないでしょう。場合によっては、旅行のための資金を蓄えておかなければならないかもしれません。これからのことを考えて、それがある程度まで形になってくれば、それは、あくまでも頭の中にしかないにもかかわらず、わたくしたちの目標になっていきます。その意味では、わたくしたちは、将来に向かって生きています。別言すれば、わたくしたちは、目に見えない将来を目に見えるようにするために、その将来によってわたくしたちの振る舞いを方向づけています。将来は、未来として実際に起こりはしていないものの、行為の導き手としてわたくしたちの中でしっかりと働いているのであります。

将来を描き出せないとしたら、わたくしたちは、どのようになるでしょうか。わたくしたちは、その場かぎりの刹那的な生き方を選ばざるをえないのではないのでしょうか。将来の展望は、わたくしたちにはありません。どれほど努力しても、どれほど我慢しても、今の事態がこれから改善する見込みは、何もありません。このような状況がわたくしたちの前に広がっていれば、わたくしたちは、いまが楽しければそれでよいという思いを抱きはしないでしょくか。そうなれば、わたくしたちは、目前にある快楽だけを求めるようになるでしょう。それは、まさしく目に見えるものに拘泥した生き方であります。それゆえ、将来がわたくしたちにあるからこそ、その実現に向けて、わたくしたちは、いまの営みの方向を定められるようになるのであります。もちろん、将来のあり方は、これまでのあり方と現在の状況から浮かび上がっています。いまのわたくしが歌手を目指して努力しても、おそらく、それは、徒労に終わるでしょう。現実から遊離した将来は、わたくしたちにとっては有効な指針にはなりません。したがって、目に見えるものから描ける目に見えないものこそ、わたくしたちの歩みを支える将来になっていくのであります。

3 仮説の働き

科学は、仮説を立てて、その探索を進めていきます。卑近な例を使って科学的な探究の実際を概観しておきたいと思ひます。というのは、科学的な探究の中でも目に見えないものが働いているからであります。たとえば、朝に目を覚まして窓から外の様子を見たときに、家の前の道路が水に濡れているのに気づいたとしまししょう。このとき、おそらく、わたくしたちは、早朝に雨が降ったのではないか、こう考えるのではないのでしょうか。雨は、広くいろいろなものを水に濡らします。だから、雨が降ったと想定すれば、なぜ道路が水に濡れているのか、その理由を明らかにできます。このように、降雨についてのわたくしたちの推測は、道路の様子を説明するために仮に立てた考え方であり、その意味で、それは、仮説の働きを担っています。もう少し一般的に言えば、仮説は、観察の対象となっている事象がなぜ生起しているのか、その理由を頭わにしています。科学的な探究では、このような仕方て仮説を立てた後、その仮説の妥当性を確認していきます。右の例で言えば、降雨があったという仮説を確かめようとして、わたくしたちは、家の前にある道路だけでなく、隣の家の屋根に目を遣ります。すると、その屋根も水に濡れています。このとき、わたくしたちは、くだんの仮説にますます確信を持つようになります。これは、仮説の検証という過程を例示しています。

仮説は、家の前の道路が水に濡れているという観察できている事実に基づいて、早朝に雨が降ったという観察できなかった事象に言及しています。この点に着眼すれば、目に見えるものから構想できる目に見えないものを仮説と呼べるでしょう。すでに述べましたように、将来は、わたくしたちの生き方の導き手になっています。それと同じように、仮説は、それを検証していくという局面では科学的な探究の指針として機能します。こうした理解を踏まえた上で、科学的な探究の実情に目を向けてみましょう。たとえば、津波は、海水のうねりとして起こります。波にはそれを伝える物質が要ります。光が波の性質を持っていることが分かったとき、物理学者たちは、頭を悩ませました。というのも、太陽の光は、なにもない真空の空間を通して地球に届いているからであります。そこで、物理学者たちは、光の波を伝達する物質に着目し、それをエーテルと呼んで、次のような仮説を立てました。地球は、エーテルの海の中で太陽の周りを静かに公転している、と。まさに、エーテルは、実験的に確認できている事実から物理学者たちが案出した目に見えないものであります。アインシュタインが相対論を提唱するまで、エーテルの仮説は、物理学者たちの探索を実際に誘導していききました。

このように、仮説も、将来と同じように、現時点ではかならずしも明確な内実を伴っていません。それにもかかわらず、仮説は、わたくしたちの活動を先導していきます。事情は、将来も変わりません。この見地から、さきほどみなさんに投げ掛けた問いに対して、わたくしは、こう答えたいと思います。わたくしたちは、目に見えるものだけを頼って生きているのではなく、目に見えないものに向かって歩みを進めている、と。物理学者たちがはじめに考案していたエーテルの仮説が失敗に終わったように、わたくしたちがそれぞれに思い浮かべている将来も途中で頓挫するかもしれません。しかし、たとえわたくしたちがそのような状況に陥ったとしても、科学的な探究が新たな仮説を生むのと同じく、わたくしたちの人生は、新たな将来に挑もうとします。むしろ、そうでなければ、すでに述べましたように、わたくしたちの人生は、行き詰まってしまう。そのような状況になれば、科学的な探究も立ち行かなくなります。どのような水準であろうと、わたくしたちの歩みの土台には目に見えないものがあるのです。

パウロは、「見えるものに対する希望は希望ではありません」（ローマの信徒への手紙8章 24 節）と明言しています。これまで注目してきた将来と仮説は、パウロの言葉を借りれば、希望になるでしょう。とはいえ、仮説を希望と見なすのは、科学的な探究を厳格に捉えようとする立場の人たちからすれば、科学的な探究の矮小化にはかならないかもしれません。堅苦しく言えば、科学的な探究は、実験と観察に基づく仮説の検証であります。エーテルの仮説を打ち立てた物理学者たちは、エーテルの実在を確かめようとしていろいろな実験と観察を試みました。すべては、成功しませんでした。それでも、物理学者たちは、エーテルの仮説が述べている内容を成就させようとして、それを願望んで、さまざまな調査に従事していました。仮説は、科学者たちの希望を表現しています。将来は、わたくしたちが具現化したいと願望んでいる内容に係わっています。将来は、わたくしたちの希望を表現しているのであります。

4 目に見えないものを望む

すでに引いたように、パウロによれば、目に見えるものに対する希望は、希望ではありません。将来にしろ、仮説にしろ、それらは、これから実際に顕わになっていこうとすることがらに結びついています。もちろん、それらの内実がまったくはっきりとした姿を取らないような場合もあります。ことによると、それらは、妄

想にすぎないのかもしれませんが。将来と仮説のこのような性格を勘案すれば、それらを次のように特徴づけられるでしょう。将来と仮説の中心的な部分は、目に見えないものの範囲にある、と。そうであるからこそ、わたくしたちは、それを期待するのであります。もしも、すでに目に見えているものが将来の姿を示しているのであれば、それは、すでに来てしまっており、未来ではありません。だから、それは、もはや将来でもありません。仮説がすでに起きている事象だけに関わっているのであれば、わたくしたちは、仮説の確証を手に行っていることになります。仮説の主張は、わたくしたちの眼前できっちりと成立しています。そのとき、その内容は、事実を示しているのであって、仮説にはなりません。だから、将来も、仮説も、目に見えないものへのわたくしたちの眼差しを映し出しているのです。

パウロも述べているように、「現に見えているものをだれがなおも望むでしょうか」（ローマの信徒への手紙8章 24 節）。目に見えているものは、わたくしたちの手元にあります。だから、それを望む必要は、わたくしたちにはありません。というのも、わたくしたちは、それを獲得しているからであります。わたくしたちは、実際に目に見えているものを改めて希求しないでしょ。目の前に現実にもものが確かにあっても、それは、わたくしたちのものではないかもしれません。とはいえ、わたくしたちが手を伸ばしたときに、わたくしたちの手がそれにちゃんと届くのであれば、それは、わたくしたちの手に入るでしょう。だから、それは、目に見えないものではなく、目に見えるものにほかなりません。これに対して、それがわたくしたちの手の及ばない領域にあれば、それを捕らえている姿は、少し先の将来にあります。その様子は、これから実際に成立していくかもしれない状況を指しています。それは、目に見えないものであります。ひょっとして、わたくしたちは、それをまったく入手できないような事態に陥るかもしれません。それは、ずっと目に見えないものになるでしょう。ほんとうのところは、わたくしたちは、そうしたものに憧れるのではないのでしょうか。憧れは、遠くにあります。このように、わたくしたちは、目に見えるものを求めているのではなく、目に見えないもの、別言すれば、いまだ接近できていないものを心待ちにしています。

パウロは、こうも述べています。「わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです」（ローマの信徒への手紙8章 25 節）。これまで強調してきたように、わたくしたちが待望しているのは、いまだ巡り会っていない希望の光ではないのでしょうか。家族とクリスマスを過ごしたいとほんとうに願っているのであれば、わたくしたちは、それを手に入れようとして、さまざまな障壁を乗り越えていくのではないのでしょうか。このような言い方は、少し大げさかもしれませんが。でも、エーテルの仮説を守ろうとして、当時の物理学者たちは、いまから考えれば、いろいろと奇妙な提案を行いました。その一つとして、地球は、その近くにあるエーテルを引きずって、その結果、その部分のエーテルは、地球といっしょに動いている、こんなふうに、物理学者たちは、おもしろい着想を編み出しました。物理学者たちは、エーテルの仮説をほんとうに信じていたのでしょう。それにもかかわらず、エーテルの仮説を擁護するどのような企ても水泡に帰してしまいました。

わたくしたちがどれほど具体的に将来を描き出そうとも、エーテルの仮説のように、残念なことに、それらのすべてがわたくしたちの思い通りに運ぶわけではありません。しかし、わたくしたちは、起こってしまったことを元には戻せません。過去を変えるのは、少なくともわたくしたちにとっては不可能であります。その意味では、将来に賭けていくしかほかに、道は、わたくしたちにはありません。わたくしたちは、将来に向けて一歩でも前に進もうとしなければなりません。そのようにしてはじめて希望が生まれ、パウロが言うよう

に、それがわたくしたちに力を与えてわたくしたちの中に忍耐を育みます。このように、将来は、目に見えませんが、むしろ、目には見えないからこそ、わたくしたちの希望として、わたくしたちを導き励まし支えているのであります。キリスト者にとって、希望は、キリスト・イエスであります。アドベントの中にあってもいろいろなことが起こるでしょう。忍耐を持ってキリスト・イエスのご降誕を待ち望みたいと思います。

おわりに

本日のアドベント礼拝では、ローマの信徒への手紙の中でわたくしに示された聖句に基づきながら、「希望—目に見えないもの—」と題して、わたくしの思いを述べさせていただきました。キリスト教に限らず、たいていの宗教は、わたくしたちの経験を越えてしまっている存在に関与しようとしています。宗教に対して胡散臭さを多くの人に感じさせてしまう要因の一つは、目に見えないものに対する宗教的なこだわりにあるのかもしれません。一部のひとたちは、宗教を騙って人々に被害を与えようとしています。そのような手口にはまりこんでしまっている人は、場合によっては、損害を被っているという事実すら自覚的でないかもしれません。というのも、宗教は、目に見えないものを信じるようにわたくしたちを促しているからであります。

このような現状がさまざまな宗教を取り巻いています。それにもかかわらず、わたくしたちの日常の生活の中でも、さまざまな水準で、目に見えないものは、わたくしたちの希望としてわたくしたちの足下を照らしてくれています。みなさんにお伝えしたかったのは、そのことでもあります。それゆえ、わたくしは、キリスト者として、宗教的境地の内包する危うさを認めつつも、同時にそれがわたくしを実際に支えてくれてもいるという実感が確かにあるのを告白しなければなりません。とはいえ、パウロのように大胆に救いの確信を証するだけの信仰がわたくしにはありません。そのせいで、このように中途半端な内容しかわたくしには語れないのでしょう。それをしっかりと心に止めておきたいと思います。

一言、お祈り申し上げます。天にましますわたくしたちの神よ、主の御名を崇めます。主のご降誕を待ち望むアドベントの期間にあつて、あなたに許され、このように奨励の機会を与えていただきありがとうございます。わたくしたちの周りでは予断を許さない状況がいまなお続いております。目に見えているものだけに振り回されるのではなく、目に見えているものから目に見えない将来を希望として描き忍耐をもってそれに向かって少しでも前進できるように、その勇気をわたくしたちにお与えください。目に見えないものを大切にできる心がわたくしたちに育つようにわたくしたちひとりひとりを憐れんでください。あらゆることに感謝して、この祈りを尊い主の御名を通して御前に捧げます。アーメン。

2022年 11 月 30 日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録